2010年1月10日　岐阜新聞掲載

ぎふ幸せ瓦版

世代超え凧揚げの輪

木曽川凧あげまつり実行委

17日、笠松町でイベント　中部地方の名人集う

凧（たこ）揚げを通して3世代の触れ合いを―。笠松町と岐南町の住民らが協力して「第5回木曽川凧あげまつり」を17日午前10時から笠松町米野の木曽川河川敷で開く。両町の住民らはこれまでにボランティアで凧作り教室を開いたり、地元の子供たちに連だこ作りを依頼するなど、まつりを盛り上げようと準備に忙しく取り組んでいる。

まつりは、凧揚げ会場の近くにある天然ビオトープ「トンボ池」を保護しようと立ち上がった「トンボ池を守る会」（可児幸彦会長）が5年前、池周辺の環境PRを狙った冬のイベントとして開始。毎年新春の恒例行事となり、昨年は全国から参加した1千人が凧揚げを楽しんだという。

今回は同会と岐南ボランティアネットワーク、NPO元気きそがわ、岐阜エストロータリークラブの4団体が実行委員会を構成。中部地方の凧揚げ名人らがオリジナルの凧を持参して集うほか、ポニーの乗馬体験や特産品の飲食ブースなどのイベントも行われる。

同委員会委員長の可児会長は「凧揚げは凧を作ることも魅力の一つ。おじいちゃんと孫が凧作りを通して触れ合いを楽しんでもらいたい」とプレイベントの創作教室にも意欲的だ。関市の凧作家小川義明さんの協力もあり、岐阜市のカラフルタウン岐阜で年末年始に4日間、家族で体験する教室を開いたほか、笠松町の下羽栗小学校でも児童らが凧作りにチャレンジした。

「世代を超えて熱中できる凧揚げ。大勢でどこまで高く揚がるかを競うのも楽しいし、凧揚げに適した抜群の環境が身近にあることも知ってもらいたい」とほほ笑む可児会長。

また今回は昨年が笠松町生誕120年だったこともあり、当日は岐なん凧愛好会（安田茂樹会長）や両町の小学生らが制作した120枚の連だこが数基揚がるほか、笠松町の依頼で小川さんが作った12畳の巨大凧が大空を舞う予定。来場者が持ち込んだ凧のデザインコンテストや、その場で凧揚げが楽しめるように市販の凧販売もある。

問い合わせは可児会長、電話090（8556）3478または安田会長、電話090（3959）7079。

（佐竹直人）

17日開催の「第5回木曽川凧あげまつり」のプレイベントとして開かれた凧作り教室＝岐阜市柳津町、カラフルタウン岐阜

記者のひとこと

親子の凧作り教室を取材すると、子供より真剣な表情で制作に取り組む親の姿が印象的だ。岐なん凧愛好会の安田会長と話すと、いまの親の世代は凧作りが未経験の人が多くなってしまったとか。記者自身もその世代だけに、凧作りの楽しさに没頭する理由にも何となくうなずける。

「将来的には凧作りだけでなく、こま回しなど昔の遊び全般が楽しめるまつりになれば」と夢を膨らます安田会長の言葉に、「まずはわれわれ親の世代が子供に教えられるよう、昔の遊びを学ばなくては…」と記者自身が苦笑いした。